

# 徳島ペンクラブ通信

発行

徳島ペンクラブ

徳島市東沖洲2丁目1-13

徳島県教育印刷(株)内

TEL 088-664-6776

173号  
平成28.4.5

## 根津氏を講師に研修会

徳島ペンクラブは3月20日、徳島駅前の阿波観光ホテルで、ペンクラブ賞の発表・表彰を兼ねた研修会を開いた。講師には、阿波の歴史を四半世紀にわたって研究されている徳島城博物館の根津寿夫学芸員(係長)をお招きした。

41人が参加。竹内会長のあいさつに続いて、ペンクラブ賞の発表と表彰を行った。「選集」33号掲載作品(俳句、短歌等は除く)の中から、会員による優秀作品の投票結果

## 城下町徳島の歴史を学ぶ

### 「選集」第33号作品対象に合評も

と、理事会の審査を経て、栄えあるペンクラブ賞は鈴木綾子さんの「豚天使」に決定したことが桂事務局長から報告された。鈴木さんには、竹内会長が賞状とお

- ⊕ ペンクラブ賞の鈴木綾子さんに竹内会長から造花のアレンジ
- ⊖ 次点の左から、六田靖子・木村喜美子・粟谷健・中村和子の皆さん



祝いの造花のアレンジを手渡した。

### ペンクラブ賞に鈴木綾子さん

に、徳島市民文芸集「まゆやま」に転載される。

次点4人の作品は次の通り。「空港のジングルベル」(木村喜美子)▽「出会った縁」(中村和子)▽「父の言葉」(六田靖子)▽「ホセ・ムヒカの託宣」(粟谷健)

表彰に続いて、杉田卓式理事が、選集作品の個人的な感想と断った上で、選ばれた上位5作品を中心に、要旨、別掲の通り講評した。この後合評に移り、木村英昭、木村義次、熊谷和代さんらが選集33号掲載作品について意見発表した。木村英昭さんは吉田徳子さんの「密室潜入事件簿」を取り



長年にわたる徳島の歴史研究の成果を話す根津学芸員

阿波観光ホテル

上げ、「文章のあり方がユニーク。いかに書くかより、何を書くかがより大切で、最後まで読ませる」と絶賛した。

最後は根津寿夫氏の講演。竹内会長が、「今年は趣向を変えて『郷土史』の先生をお招きし

ました」と講師先生を紹介。根津氏は「日記からみた城下町の社会と生活」と題して1時間余りにわたり、私たちを江戸時代の城下町徳島へといざなっていた。古文書や日記を通して、「江戸時代の人は遊び好き」「天保年間の徳島城でカステラが振る舞われた」など興味の尽きないお話にて、時間の経つのも忘れるひと時だった。

合評タイムに意見を述べる  
木村英昭さん④と  
97歳の木村義次さん⑤



あいさつする新入会員の山口久雄さん④と山崎靖子さん



午後、昼食をとりながら和やかに歓談した。その冒頭、元副会長の上野隆参与が、野口雨情の歌碑完成の報告とペンクラブの協力に対してお礼を述べた。この歌碑は、有志が「歌碑を立てる会（上野隆会長）」を立ち上げ、基金を募り、雨情の来徳80周年に当たる2月21日に除幕式を行った。設置場所は、徳島市役所に近い徳島中央公園への陸橋近く。碑石の青石は、ペンクラブ会員の木村義次、喜美子夫妻が寄贈した。

## 杉田理事の講評

### 要旨

私の読ませていただく基準は、エッセーにさまざまな要素がもたらされているかどうか、です。

●1つは、内容の空気感です。その空気は▽風が吹いているか、微風か、強風か▽温かいか、冷たいか▽甘いか、辛いか、酸っぱいか▽臭いかどうか、それに季節感、要するに読者が「体感できるかどうか」ですね。

●2つ目は、人気のテレビ番組で俳句の女先生が、よく話していることですが、「映像が浮かぶかどうか」ですね。すんなり抵抗なく、さらりと読み出せる、原稿が好きです。

●3つ目は、一番重要な内容ですね。何を書くか。何をまとめるか。単なる身边雑記と思っても、その中に、筆者の人生観や価値観が、語られているかどうか。要するに筆者のハートが語られているかどうかだと思います。

■鈴木さんの「豚天使」は日常の1コマを切り取って、文面から夫婦の会話の息遣いが聞こえてきそうです。ご主人の網膜はく離の状況やご自身が、すだち畑で孤軍奮闘する様子が、面白く、伝わってきます。やはり文章は、筆者の意図が、読者に伝わらなければ意味がありません。分かりやすい、夫婦間の空気が、手に取るように伝わってくる、好エッセーだと、称賛を送りたいと思います。

ちょっと疑問に思ったのは、書き出しに「白い可憐なすだちの花が咲き、甘くさわやかな香りが辺りに満ちているころ」とあって、結びに「すだちの夏が終わりました。大空も心も澄みわたる、上勝

の秋を迎えます」

ここに描かれたスタチの路地物の収穫は、  
时期的に、いつごろなんでしょう。文面に  
季節の移ろいを、もう少し練り込むとどうな  
んでしょうか。やや書き込みがたりないか  
な、と感じました。

もう1点。冒頭にすだちの花が咲くころ「甘  
くさわやかな香り」とありますが、「さわや  
か」は秋の季語ですよ。エッセーは「さわ  
やか」な秋から始まって、終わりは「秋を迎  
えます」、えっ、いったいどういうこと？ と  
思った次第です。

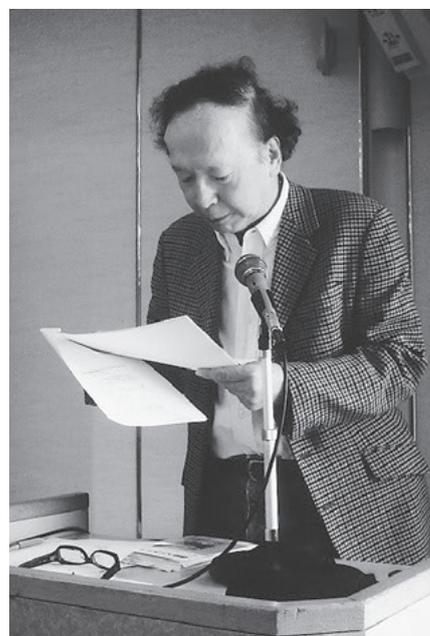
■中村さんの「出会った縁」は文頭の「初対面の人に会ったとき、  
私が好意を寄せている人に似ていると、瞬時に、私は相手に好感を  
もつ」とありますが、えっ、何？ 恋愛の男と女の話か、とわくわ  
く感がありました。

いやいや、そうではなくて、大真面目な内容でしたが、次に読み  
進むと「かなり昔の晩秋のある日、裁判所に出頭すると、」う？ 何？  
裁判所？ とまあ、読み進むにつれ興味をそそられます。これは筆  
者のテクニクでしょうか。裁判所には「出頭」と言う言葉を使う  
のでしょうか。

で、「私信が届いていた」と本題が始まります。なるほどなあ、  
と読み進めました。筆者が意識されたかどうか分かりませんが、読  
者に読ませる工夫の一つだろうと、思いました。

締めは「藍染のスカーフ一枚」と、なかなか小道具もそろって、  
気配り上手な筆者だろうと、思いました。次の機会には「人間の本  
性」と言いますか、調停の裏にある一種どろどろしたものを読ませ  
てほしいと思います。

■六田さんの「父の言葉」は大きなテーマを、「父の言葉」として、  
まとめられた筆者の真剣なまなざしを感じます。書かれている背景  
に、戦争や人種問題が絡んでいます。筆者は子供のころ、大変な  
ご苦労をなさったんだろうと推測されます。山崎豊子の「大地の子」



を連想しました。当時の日本人の大人たちの  
真摯な生き方が、つまり「父の言葉」と重な  
ります。全般にさらりと書かれています。が、  
なかなか含蓄のあるエッセーだと思いまし  
た。ただ、締めの一文、「自分が恥ずかしい」  
は不要ですね。これを書く、いかにも素人  
っぽい、締めになってしまいます。

■木村さんの「空港のジングルベル」文章  
の書き出しって、難しいですね。読者をどう  
引き込むか、ですが、瀬戸内寂聴さんが、何

かの機会に言っていたと記憶するのですが、「例えば20枚の原稿を  
書いたら、最初の5枚を捨てなさい」 どういうことか、みなさん  
お分かりと思いますが、たいていは振りかぶって書いてしまいます  
し、美辞麗句を並べたくなりがちです。本題にすんなり入りなさい、  
ということですよ。

その伝で言いますと「空港は、白い柳の花が飛び、追つたてられ  
るように、旅人の群れは花に包まれて空港に群がっていた」はちょ  
っと書きすぎ、と言いますか、私には、よく分かりません。

つまり「1988年、LCの世界大会が…」からこの文章が始ま  
ってもよかったです。空港ではないでしょうか。空港での様子は面白くてよ  
かっただけに、書き出しの工夫がほしいと思いました。次作を期待  
しております。

■粟谷さんの「ホセ・ムヒカの託宣」は、吝嗇老爺りんせつらうやが、いかななく  
書き込まれていて、読ませる読み物だと思います。

「メーカー品」使い捨ての時代「大量生産の欺瞞」など、痛烈な  
社会批判を交えながら、主義主張もはっきりしていて、面白く読ま  
せてもらいました。文中の「山本夏彦さん」には、最低「随筆家」

とか生没年（1915〜2002年）などの表記が必要だと思いま  
す。ウルグアイの大統領の「足るを知る」思想に共感を覚えます。

さて筆者に、原発問題について、どう書かれるか興味深いところ  
です。次作に期待したいと思います。

# 来年・2017 ペンクラブ創立50周年

## 記念誌の発行を決める

### 編集長に 杉田卓弉理事

徳島ペンクラブは来年創立50周年を迎えることから、1月の理事役員会で記念誌の発行を決め、実行委員会を立ち上げるなど体制づくりに乗りだした。これまでに決まった計画概要は、委員長に竹内菊世会長、編集長に杉田卓弉理事、アドバイザーに、40周年記念誌の編集長を務めた上野隆参与。その他のスタッフは未定だが、理事・役員に加え、一般会員のなかからも有志に加わってもらおう方針。

**全 会 員**  
**こぞって寄稿を**  
会長 竹内 菊世

徳島ペンクラブが誕生したのは昭和42年（1967）11月。来年で50年になる。私が入会したのは1970年、昭和45年であるが、草創期からの会員もおられるのではないか。「四十年誌」をひもとくと、燃えるような熱い思いをもって発足した、当時の情熱が伝わって来る。

徳島ペンクラブが誕生したのは昭和42年（1967）11月。来年で50年になる。私が入会したのは1970年、昭和45年であるが、草創期からの会員もおられるのではないか。「四十年誌」をひもとくと、燃えるような熱い思いをもって発足した、当時の情熱が伝わって来る。

努力しようとの発想は、50年を経た今も変わらないはずである。たまたまこの時、50周年記念の時に居合わせた、会員一同結集して、後世に残る記念誌をつくりたいものである。

今書き残すことは、必ず次代へ伝える。思いがあっても表現しておかなければ消えてしまう。全

県内の文学団体が一つになつて、「モノの言える集団」をつくり、文学の地位向上に

会員、今いることの証に、多少に関わらず寄稿してほしいと願っている。

今後は、早速にスタッフや役割分担を詰め、月1〜2回の編集会議を持ち、記念誌の規格、発行部数、予算、構成内容など骨格を決める作業を進める。編集会議等はポツポツ街の丁字堂で行う。

ちなみに、平成19年2月25日に発行された40周年記念史は、B5判410ページ、カラー表紙だった。



平成19年発行の40周年記念誌

## 総 会

### 5月21日 阿波観光ホテル 辻本理事が実演とお話し

徳島ペンクラブは3月5日、県立文学書道館で開いた理事役員会で新年度の総会を5月21日（土）午前10時30分から、徳島駅前の阿波観光ホテルで開くことを決めた。

総会では今回も記念講演を計画。会員で理事の辻本一英さん（芝原文化研究所代表）に「福を運んだでこまわし」と題して、三番叟まわしの実演とお話をしていただく。会費3、500円。出席される方は同封のがきにて申し込む。なお、出席取り消しの連絡は、2日前までに事務局長の桂ゆたかさんまで。それ以後については、欠席されても会費を請求させていただきます。ご了承ください。

# 第17回とくしま随筆大賞

## 応募締め切り 1カ月延長6月末

17回目を迎えるとくしま随筆大賞(徳島ペンクラブ主催)の募集要項がこのほど次の通り決まった。募集期間が高校、大学の春休みを挟むため、締め切りを従来より1カ月延長し、6月末とした。

●**応募規定** 内容は特に規定しない。エッセー、随想、主張など何でも自由。1人1編、未発表作品に限る。A4四百字詰め原稿用紙3枚以上5枚以内(縦書き)。ワープロの場合はA4用紙に1行40字で字数は同じ。1行目に作品名と氏名を記入してください。別紙に、作品名・氏名・年齢・郵便番号・住所・電話・ファックス番号を明記。

●**応募資格** 徳島県内在住者、または徳島県出身者で県外在住者。  
●**作品送付先** 〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目1の13、徳島県教育印刷(株)内、徳島ペンクラブ「第17回とくしま随筆大賞」係。

●**締め切り** 6月30日(当日消印有効)

●**発表** 8月(予定)徳島新聞朝刊紙上に掲載。本人宛にも通知

●**賞** 大賞(1編) 賞状・賞金3万円

▽準大賞(1編) 賞状・賞金1万円

▽佳作 1〜2編(賞状・賞金5千円)

大賞・準大賞の受賞作品は12月下旬発行予定の「徳島ペンクラブ選集」に掲載する。

●**表彰式** 平成28年9月を予定。

●**審査員** 依岡隆児(徳島大学総合科学部教授)▽撫養佳孝(徳島新聞生活文化部デスク)▽竹内菊世(徳島ペンクラブ会長)

☆この件のお問い合わせは、ペンクラブ副会長の西池冬扇さん

088-642-1406(午前中のみ)まで。

# 第6回

## 富士正晴全国高等学校文芸誌賞

### 2年連続盛岡第四高に栄冠

#### 三好市で盛大に授賞式

第6回富士正晴全国高等学校文芸誌賞Ⅱ文芸誌甲子園(主催 同賞実行委員会、三好市・三好市教育委員会)の授賞式が、3月19日、三好市のサンリバー大歩危であった。昨年に続き2年連続最優秀賞に輝いた岩手県立盛岡第四高等学校や優秀賞に選ばれた北海道札幌琴似工業高等学校など4校、それに奨励賞の高知県立岡豊高等学校の文芸部顧問・文芸部員、選考委員、主催関係者ら40人が出席。2次選考担当の徳島ペンクラブからは鈴木副会長ら3人が参加した。

実行委員長黒川市長のあいさつ、受賞誌の紹介に続いて、選考委員の伊藤氏貴(明治大学准教授)、三田村博史(中部ペンクラブ会長)、佐々木義登(四国大学准教授)の3人がそれぞれ講評を行った。この後表彰式に移り、最優秀賞の岩手県立盛岡第四高校代表に、賞状と盾、奨励金10万円が黒川実行委員長から授与された。優秀賞の北海道札幌琴似工業高校など4校に賞状、盾、奨励金各3万円、奨励賞に選ばれた8校の内ただ1校出席の高知県立岡豊高校には賞状が贈られた。また、最優秀の志高文芸誌の中の小説「夏が始まる」が、審査員特別賞に推され、作者の武田穂佳さんに賞状と図書券が授与された。



黒川市長(委員長)から最優秀の賞状を受ける岩手県立盛岡第四高校代表

● 第6回受賞校(人)の一覧 ●

審査員 特別賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞	優秀賞	優秀賞	優秀賞	優秀賞	最優秀賞	
「夏が始まる」 武田 穂佳	彩 第19号	鵬雛 函南68th 第3号	窓 第七二号	零改 其ノ漆	飛沫 2015	紫苑 第四十九号	煌 第十二号	文芸部誌 色々 第三十一号	いさらゐ 第57号	下駄箱 第11号	黎 第十五号	風花舞 第29号	志高文芸四十九号
岩手県立盛岡第四高等学校 志高文芸四十九号	高知県立岡豊高等学校	兵庫県立神戸高等学校	滋賀県立彦根東高等学校	高田高等学校	山形県立新庄北高等学校	仙台白百合学園高等学校	岩手県立水沢高等学校	北海道札幌東高等学校	筑紫女学園高等学校	ティア高等学校	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	岩手県立盛岡第三高等学校	岩手県立盛岡第四高等学校



受賞校代表と関係者で記念撮影

選考委員の講評の中で、佐々木氏は最優秀の志高文芸について、「想像力の豊かさ、これは自分で考えて出すものだが、これが素晴らしく、去年よりさらにレベルアップしていた。装丁や編集も最高レベル。部員の質が総じて高く他校と一線を画していた」と評価していた。授賞式の最後に、盛岡高校の土屋映里さんが、受賞校を代表して、また審査員特別賞受賞の武田さんがそれぞれお礼の言葉を述べた。式の後レセプションがあり、出席者が飲食

見 目 碑 歌 の 望 待 に 都 県

雨情来遊80周年

溝 沢 匠

を共にしながら歓談した。  
今回は、全国の31都道府県から61誌の応募があった。県内からは徳島北、脇町、池田の3校が応募したが、受賞はならなかった。

かねてからの念願であった「むかし忍んで徳島城の松に松風絶へやせぬ」の野口雨情の歌碑が、多くの方のご協力により、ゆかりの地で雨情来遊八十周年記念として誕生したことは、まことに感無量です。

この事業のために、まず最初に情熱と迅速さで定評のある住友武氏が事務局長をやってもよいと名乗りをあげてくださったこと。次に会長役を、おおらかで企画力に優れた上野隆先生がお引き受けくださったことが、この事業を推進する上で大きな原動力となりました。そして、あつと言つ間に、ペンクラブを始め、音楽グループ、朗読グループなどによる強力な役員体制ならびに協力団体が決まったことが、この事業の成功につながったと思います。

また、木村義次氏から貴重な阿波青石のご寄贈をいただいたことも、この計画推進に拍車をかけることとなりました。

記念行事の「雨情の世界」は、上野会長が自ら企画し、役員の見解を取り入れ、実にスマートなものとなり、好評を博しました。これは、上野会長が早い段階で雨情の生家を訪問し、不二子さんと対話をされたこと、徳島青少年少女合唱団やあすなるバレエスタジオと度重なる交渉をされたこと、音楽関係者や朗読関係者から数々の積極的な提案があったことなどによるものです。



徳島市幸町1の徳島中央公園への陸橋下横に完成した雨情の歌碑。高さ1.7m、幅2.3m。ボタンを押すと、雨情の詠んだ「むかし忍んで徳島城の…」の小唄などが流れる音響装置付き

の加藤安子さん（当時80歳）から「私方に徳島城を詠んだ雨情さんの直筆があります。よかったら見に来てください」という情報がはいりました。あの時、加藤さんがあの放送を見ていなかったら、あるいは、お電話をくださらなかったら、当然歌碑の計画にはつながっていないはずです。

折角、雨情のすばらしい詩の直筆が見つかったので、ゆかりの地で歌碑になればと思いい、数年にわたり徳島市の心当たりの方に声を掛けてみましたが、引き受けようという方は現れませんでした。

昨年7月12日のことです。住友氏と二人で丹生谷の知人の米寿祝いに行く途中、牟岐線の車中談として右の経緯を住友氏に縷々話しました。するとその直後に、住友氏から「雨情の歌碑の件、会長を探してくれば事務局長を引き受けてもよい」との電話が入りました。熟慮の上この方ならと、上野先生にお願いをしました。すると「一度お話を聞いて見ましょう」とのご返事を頂き、7月19日に三者による会合となったのが、この事業の始まりでした。

今、振り返ってみますと、「むかし忍んで…」のあの歌碑が建

ったのは奇跡だったと思います。平成14年6月6日の四国放送の「おはよう徳島」で「野口雨情県内の足跡をたどる」という放送があり、私もゲスト出演していた時のことです。アナウンサーが「雨情さんに関する情報があればお電話ください」と呼びかけますと、数件の電話がありました。その中に徳島市内

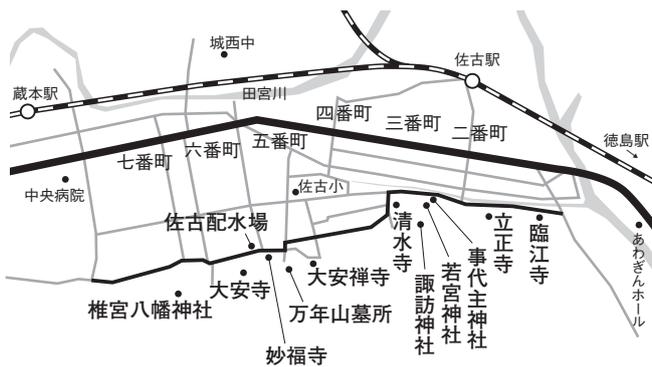
先般除幕した雨情歌碑は、まことに県都にふさわしいものであり、全国約220基の雨情歌碑の中で最秀逸の評価が得られるものと確信します。特に音響設備の併設は、上野、住友両氏の肝いりでできたもので、全国的にも例のない誇らしいものとなりました。

● 春の文学旅行 ●

県内の文学散歩に衣替え

第1回

南佐古の山麓コース  
由緒ある寺や神社、墓所も



ペンクラブの文学旅行はこれまで春と秋の2回、県外旅行を実施してきましたが、2月の理事役員会で今年から春は取りやめ、代わって徳島市内を中心に県内の文学散歩に衣替えすることを決めました。

第1回目は今春は、4月29日、眉山の北麓南佐古コースで行う。午前10時、あわぎんホールのホール入り口前広場に集合、南佐古1番町の臨江寺から略図のように、眉

4月29日（祝日）

山の麓沿いを由緒ある寺や神社、墓所などに立ち寄りながら西進、JR蔵本駅前解散するざっと4時間のコース。

臨江寺は、NHKドラマ「軍師官兵衛」に登場した黒田長政正室糸姫や、蜂須賀正勝の側室の墓所がある。諏訪神社から幕末の三筆

として知られる貫名松翁ゆかりの清水寺へ。次は、蜂須賀家の墓所を訪れ、「万年山文庫」というおしゃれな喫茶店で一服。休憩の後佐古配水場に立ち寄る。ここには、国の文化財になっているレンガ造りのレトロな建物がある。続いて、藩主が愛飲したといわれる「菩薩泉」のあった大安禅寺。

最後は椎宮八幡神社。ここには、保田與重郎が師と仰いだ、国学者池邊眞榛の景仰碑がある。また、阿波狸合戦の金長方の狸を大神として祭る祠がたくさん見られる。

昼食は、椎宮神社の近くに「竹庵」といううどんの店があり、ミ二井の付いた安くておいしいうどん定食（どれも500円）がお勧め。その後、佐古八幡町、中央病院東側にできている「caido」というおしゃれなカフェでコーヒーでも飲んで、蔵本駅前解散というプラン。

今回の文学散歩の担当は丁山俊彦理事。事前に下見をしてコースを選定していただいた。多数の会員の参加を期待している。

この件のお問い合わせ、参加申し込みは前日までに、  
丁山さん（携帯090-4508-0538）へ。

## 新入会員

（敬称略、カッコ内は推薦人）

山口 久雄 〒770-0865

徳島市南末広町5番70-606（竹内会長）

多田 洋子 〒779-3212

名西郡石井町藍畑字東覚円110-5（竹内会長）

喜島 政行 〒776-0005

吉野川市鴨島町喜来93-3（竹内会長）

山崎 泰子 〒773-0006

小松島市横須町11-81（鈴木副会長）

国見 利昭 〒779-4104

美馬郡つるぎ町貞光太田東330（鈴木副会長）

## 訃報

児童文学作家の 原田 一美さん



元徳島ペンクラブ理事で児童文学作家の原田一美さんが3月1日、肺がんのため吉野川市内の病院で死去した。89歳だった。

吉野川市山川町出身で、県内の小中学校で教師を務め、1987年富田小学校長を最後に退職した。60年代に赴任していた吉野川市美郷の中枝小学校で児童と取り組んだホタル研究を題材にしたノンフィクション「ホタルの歌」で、第1回学研児童ノンフィクション文学賞を受賞した。

日米親善の使者として戦前、米国から神山町の神領小学校に贈られた人形アリスがモデルの「青い目の人形―海を渡った親善人形と戦争の物語」も代表作。このほか、「十六地蔵物語」「モラエスと小坊さん」「烏雲物語」など、郷土に関わるテーマの作品で知られる。

編集子も県の高齢者向け情報誌「いのち輝く」の編集者時代、特集「21世紀への伝言」で、原田さんに徳島大学の女子学生と対談してもらったことがある。その時の「幼児にはお母さんが図書館になる」という言葉が印象に残った。女子学生を相手に、実のお孫さんに話しかけるような優しい言葉遣い、温かい眼差しが今も脳裏に焼きついている。ご冥福を祈る。

## 片山 文夫さん

肺炎のため阿南中央病院に入退院していたが2月11日、急性心臓病で死去した。93歳。県教委社会教育主事、県立聾学校校長、徳島文理大学講師などを歴任。著書に「鮎」、「私は新兵」（徳島県出版文化賞特別賞受賞）「奇抜な校長」、「新兵物語」蜚かご。阿南市文化賞、徳島ペンクラブ賞、とくしま随筆大賞準大賞など受賞。

## 編集後記

この通信173号では、他にも紹介したい事柄が幾つかあったが、誌面の都合で割愛せざるを得なかった。選集の作品に寄せられた会員外の読者の声、杉田画伯、こと三木田卓郎さんの個展のニュースなど。秋の県民文化祭参加イベントと、次号「選集」の特集のテーマが「海野十三の世界」（仮題）にほぼ決まっていることも。こちらは6月発行予定の次号でお知らせしたい。（倉）